令和4年12月号No.176

絵はがき等原爆関連資料を長崎原爆資料館に寄贈

本会会員　堀田武弘

昨年(令和3年)11月30日付の長崎新聞1面に、大きく「長崎刑務所浦上刑務支所の写真発見」の記事が載った。さらに今年2月、NBC長崎放送が夕方の報道番組「ピント」で「戦前の長崎　原爆投下前の風景」のタイトルで7分にわたって放送した。これらのニュースは、筆者が長崎原爆資料館に寄贈した絵はがきのことである。

昭和4年の浦上一帯。中央上、浦上刑務支所　右上、浦上天主堂

この絵はがきは、筆者が昨年、ネット・オークションで入手したもので、落札金額は安く、入札相手もいなかった。

入手した絵はがきのことを長崎原爆資料館の学芸員に話すと、「戦前の浦上を写した写真はほとんどないんですよ」ということだった。また、長崎新聞社とNBC長崎放送の記者に絵はがきの存在を話したところ、2社の記者は学芸員にその貴重さを聞き、記事にした。

絵はがきは長崎刑務所浦上刑務支所の新築落成記念として昭和4年(1929)に発行された3枚1組の絵はがき、浦上刑務支所は現在の平和公園、平和祈念像が建つ地にあった。城山小学校付近の高台から浦上全景を写したものがメインで、その他に刑務支所の管理棟、施設の一つで教悔堂と説明がついた内部写真の3枚組である。

この絵はがきには浦上刑務支所と相対するように建つ浦上天主堂も写っている。浦上天主堂正面の双塔が完成したのは大正14年(1925)、東洋一といわれた浦上天主堂はわずか20年で姿を消したことになる。この浦上全景を写した写真には国鉄線路、浦上川、中央部には駒場町の広い空き地が写るが、ここには間もなく中小工場群が建設される。現在のサッカー・ラグビー場、市民プールとなるところで、平和な時代の浦上一帯の風景である。

絵はがきは2組を寄贈したが、戦前の長崎は要塞地帯法等により、写真撮影、スケッチ、測量等は厳しく制限されていた。このため戦前の長崎の街並みや長崎港を広く撮影した写真等はほぼ存在しない。これらの写真を取り締まったのが長崎要塞司令部、例会で紹介した写真の1枚が長崎要塞司令部の建物で大正初期、平戸小屋町時代のものである。この絵はがきもこれまでに紹介されたことがない1枚だと思う。

3点目の資料は、終戦後、長崎に進駐したアメリカ第2海兵師団が、これまでに転戦した部隊の活躍をまとめた記念アルバムで、国会図書館等、日本国内には数冊しか存在しない貴重な書籍である。B4サイズ40ページ余り、内容は長崎での様子が主になっているが、「死の谷」と説明をつけた1ページ大の写真は、原爆で人間も、街並みも、生きとし生けるものすべてが消し去られた廃墟の浦上全景写真である。おそらくアメリカに帰国した兵隊たちは自慢げに、原爆の威力、強大な米国を家族や友人たちに語ったのではないだろうか。

筆者は、原爆関連の書籍や資料等はすべて長崎原爆資料館に集めるべきだという考えである。

関心ある市民や研究者は、長崎原爆資料館で閲覧したり、提供してもらえばいい。現在の人員体制や設備はまだまだ不充分であるが。長崎原爆資料館のさらなる充実と発展を願って、原爆関連資料の寄贈を続けたいと思う。

本稿は、令和4年10月例会の発表「寄贈・委託した原爆関連資料」の要旨である。